



きじむんのとぅ～ちゅいむにい～ 古文書入門編

第3回 古文書の紙 ～琉球の紙漉き～

キーワード：百田紙 芭蕉紙 金城樋川 カジノキ 糸芭蕉 アオガンピ 勝公彦

ハイサイ！ きじむんやいびーん。

スーマンポーヌーニ アミヌ イキラサイネー ヒャーイ スン ウフサティン イキラサティン ジャーフエー ヤサヤ一。(梅雨の時期に少雨だと日照りになるし、雨は多すぎても少なすぎても困るよねえ～。)

今回は、古文書の紙のお話。紙の作り方を知ってる？

古代エジプトや古代中国では、紙の作り方は国家機密。琉球王国では、紙は貴重だったよ。

琉球に紙漉きの技術が導入されたのは、1694年。大見武憑武(おおみたけひょうぶ、1642-1713)が、薩摩で、杉原紙と百田紙を作る技術を修得して琉球へ伝えたといわれています。

日本では紙漉きの原料は、楮(コウゾ)・三桠(みつまた)・雁皮(がんぴ)です。琉球では、それらの生育には向かないので、カジノキ・糸芭蕉・青雁皮(あおがんぴ)などを主に使っていました。カジノキは、クワ科の落葉高木で、樹皮が紙の原料になります。糸芭蕉は、芭蕉科リュウキュウバショウのことで、芭蕉布の原料として有名ですが、紙の原料にもなります。アオガンピは、ジンチョウゲ科の低木で、海岸近くの低地などに生育します。その樹皮が紙の原料になりますが、現代の海岸の埋め立て工事などの影響でアオガンピは沖縄から姿を消しつつあります。

琉球で作っていた紙の種類は、百田紙(ひやくたし)、芭蕉紙などいくつかの種類がありました。百田紙(ひやくたし、ムンダガミ)は、クワ科の楮(こうぞ)の樹皮でつくる和紙で、主に王府への文書用の公用紙として使用されました。1840年には首里儀保村宝口にある王府直轄の紙漉所でつくられるようになりました。

芭蕉紙は、1717年に琉球で開発された紙で、糸芭蕉の繊維から作ります。芭蕉紙の技術は一度は途絶えたのですが、1978年に勝公彦(かつただひこ)さんが復活させて現在に至ります。

紙で面白いものとしては、あの世のお金、紙銭(打紙)があります。あの世の人へ持たせるお金としてお盆の行事や葬送儀礼で燃やされるお金です。これは、首里の儀保で作っていました。

また、今は途絶えた紙として通草紙があります。植物のカミヤツデから作る低質の紙で、造花用などで使われていました。今ではその技術も失われてしまいました。

紙を作るには、良い水が必要です。琉球では、紙漉きの水を取る有名な井戸としては、金城樋川(かなぐすくひーじゃー)、山川樋川(やまがわひーじゃー)、宝口樋川(たからぐちひーじゃー)があります。

実際に芭蕉紙や青雁皮紙を見たいかたは、琉球大学博物館(風樹館)の展示室で展示中ですので、ご覧ください。風樹館は、琉球大学千原キャンパスの農学部の隣にあります。

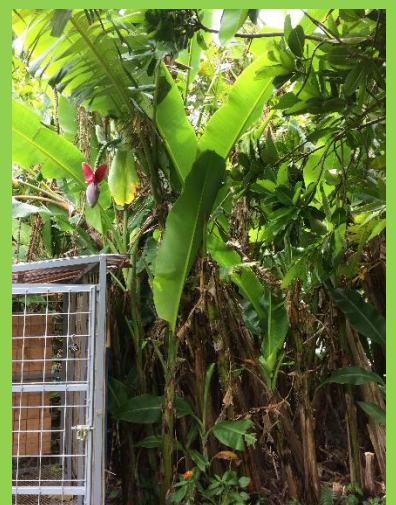
古文書を見るときは、内容もさることながら、どんな紙に書かれているのもご注目ください。琉球大学附属図書館ホームページ、デジタルアーカイブで古文書の紙を見比べてみるのも面白いですよ。(AS)



参考文献

沖縄の紙を考える会編「沖縄の工芸 紙」沖縄文化・工芸研究所発行、2004年
沖縄大百科事典「紙漉き」

👉デジタルアーカイブはこちらから



👉糸芭蕉